

# 「農と食」 北の大地から

連載第 200 回

## アニマルウェルフェアの現在 採卵鶏などの「脱ケージ」をめぐる

卵の値段や品質に関心はあっても、どんな過酷な環境で鶏たちが生活しているのか知らずともしない多くの日本人。9割前後の市民がアニマルウェルフェア(家畜福祉・AW)に対する関心を示し、新たな法律の制定を求めて署名運動などのキャンペーン活動を展開する欧州の市民たち。今、採卵鶏のケージ飼育を廃止して「ケージフリー卵」の生産・流通に転換する国が増える中で、日本は世界の潮流から取り残されようとしている。そうした状況を少しでも読者に知ってもらうために、農林水産省の外郭団体が実施した飼育実態のアンケート結果や研究者による調査、民間のAW団体が企画したセミナーなどの内容を紹介し、今後の日本のアニマルウェルフェアのあり方について考える。



▲道内には数少ない放牧養鶏を手がける農場も(栗山町のThe北海道ファームで)

◀鶏には外敵を避けるために止まり木によって休む習性がある(厚真町の小林農園で)

# 消費者の「安ければいい」「意識で世界から取り残される家畜福祉

日本の採卵鶏では95%以上「ケージ飼育」はAWに反する

高病原性鳥インフルエンザの発生で卵の値段が高くなった今春、知人のSNSに米国在住の日本人女性による、こんな投稿がシェアされた。「…今一度考えてみてほしい。『動物が産出する商品(卵、ミルク、肉など)は、その動物のQOL(生活の質)

が値段に如実に反映されている』ことを…。養鶏業者が良心的だから安くしてくれるのではなく、鶏さん自身の犠牲の上に成り立っている、ということ。日本では、まだまだアニマルウェルフェア(動物の福祉)の視点が足りなさすぎる。海外ではマクドナルドでさえバタリーケージ(箱状の檻)からの卵を買うことを禁止しているのに、日本では『バタリー

ケージって何?』というレベルである(4月6日付フェイスブック「トンプソン真理子のまりとん塾」より) 米国ではケージ卵は1パック3ドル、平飼いは4〜5ドル、放し飼いは7〜9ドル。だから、「ここでは『鶏の卵は物価の優等生(だった)』という話は誇るべきことでもない」といい加減理解するべきではないか」と指摘する、とても共感できる投稿

だった。 農林水産省の外郭団体(公社)畜産技術協会は2015年、業界団体に委託して実施した、畜産動物の飼養実態調査の結果を公表した。日本の採卵鶏の約95%がバタリーケージで飼われ、1羽あたり収容面積はA4判(624平方センチ)より狭い農場がほとんどだ。「370〜430平方センチ未満」の養鶏場が最も多く、



すし詰め状態。1ケージあたり収容数2〜6羽が75%に上り、ケージの高さは「45センチ未満」と、鶏にはきわめて窮屈な居場所である。 北海道では、3千羽以上の採卵鶏を飼う養鶏場は56戸、1戸あたり飼養数は93・7万羽(農水省「畜産統計」22年2月現在)と大型化し、そのほとんどがケージ飼育だ(注1)肉用鶏(ブロイラー)は全国平均を大きく上回る9戸、約58万羽/戸で、大

てはやし、現場の情報に疎い多くの消費者は卵の値段や味にしか関心を示さない。どんな環境で飼われているのか、無知な状態のままだ。 欧州が先行し、米国は後追いアジア圏にも取り残される日本

世界の潮流は、採卵鶏の「脱ケージ」に向かっている。 EU(欧州連合)は2012年から採卵鶏のケージ飼育を禁止する方針を決定した。掲載した表は、NPO

方もと鶏は、地面を突ついて餌をついばみ、砂浴びをして体の汚れを取り除き、暗くなると外敵を避けて高い木に止まって休む動物である。ケージに収容したり、狭い鶏舎に閉じ込めて急速に太らせることは、動物の習性や生理・生態に適った飼育方を追求するアニマルウェルフェア(AW)の基本に反する。

法人さっぽろ自由学校「遊」主催のAW講座(今年3月開催)の講師を務めた、麻布大学獣医学部教授(農業経済学)の大木茂さんが世界のケージフリー卵の割合をまとめたものだ。 IEC(国際鶏卵委員会)加盟のEU諸国のうち、オーストリアやドイツ、オランダ、スウェーデン、デン

採卵鶏のケージ飼育は、密飼以外にも問題が多く、砂浴び場や止まり木は設置されず、8割を超える採卵鶏は突つき合いを防ぐことを目的に、嘴を切断するピークトリミングが行なわれる。

マークの5カ国は、すでに8割以上の「ケージフリー卵」を実現。フランスも倍増しているが、旧東欧諸国は緩やかな伸びにとどまる。EU以外に目を転じると、日本よりケージ比率が高い国は、メキシコや中国、インドなど数カ国にすぎない。

こうした実態にも関わらず、マスコミなどは「卵は物価の優等生」と持

いつも日本の畜産業界がお手本にしてきた米国では、ここ10年ほどの



日本の採卵鶏の95%はバタリーケージに収容され、自由に地面を歩き回れずに短い生涯を終える。1羽あたり平均飼育面積はA4判より狭く、世界の潮流が「脱ケージ」に向かう中で日本は取り残されている(写真提供:認定NPO法人アニマルライツセンター)





「End the Cage Ageキャンペーン」の様子(セミナーのライド画面から)

すでに一部規制がある採卵鶏や母豚などへのケージ飼育の制限に加え、ウサギや若鶏、種鶏、アヒルなども規制の対象にするもの。キャンペーンを主導してきたC I W Fは、23年中のEU委員会による法律案の作成と、翌年の法制化の実現に向けて活動を続けている。

6月30日、一連の活動を推進するC I W Fの欧州責任者、オルガ・キコウさんを講師にオンラインセミナーが開かれた。主催者はアニマル

ウェルフェア畜産の実践農場や加工・流通関係者、研究者、消費者らでつくるAWFCJ(アニマルウェルフェア・フード・コミュニティ・ジャパン。矢崎栄司代表)。このセミナーには250人を超える参加申し込みがあったという。

参加者からは多くの質問が寄せられたが、筆者が印象に残った講師のコメント(要旨)を記しておく。

「EU市民を対象にした世論調査の結果、94%がアニマルウェルフェアの推進を支持し、84%の人が現在より向上することを求めている。(実際には)多くの人は動物の飼育実態について知らないで、その悲惨な環境に焦点を当て、より良い(改善の)方法を提起する」とい

「産業的な畜産は、気候変動や森林伐採、生物多様性の消失などに大きな影響を与え、(環境に対する)汚染源にもなっている。また抗生物質の投与は、アニマルウェルフェアのレベルが低い飼育条件を補い、動物由来の感染症の温床にもなる」

「EUはケージ飼育の影響について、欧州食品安全機関(EFSA)に調査を依頼し、同機関は科学的根拠を基に『ケージ飼育の動物のほうが苦しむ』と明確に位置づけた。どの飼育システムでも鶏の突つき合いやカニバリズム(共食)は起きるが、ケージ飼育では鶏が危険から逃れるための行動を制限してしまう」

「市民と市民グループが変化を求め、『動物をより良く守ろう』と声を上げると政治家も動かざるを得なくなる。また、国家間の取引や環境問題も重要な役割を果たす。ネットやSNSをシェアすることで家庭にも情報が届く——変化は速く訪れており、日本が他地域に追いつくには、さほど時間はかからないだろう」

このセミナーの2日前、農水省はアニマルウェルフェアの指針を公表した。家畜の種類ごとに推奨事項をまとめたものだが、具体的な数値目

「遊」(011・252・6752) または滝川(090・9085・9078)まで。

※筆者が編集および一部執筆したアニマルウェルフェアの入門ガイドが、さつぽろ自由学校「遊」から刊行された。A5判56ページのブックレット(無料)で、「家畜福祉をめぐる歴史」といま「北海道の実践農場訪問記」(畜産動物以外のウェルフェア)を軸に構成。問い合わせ、お求めは

「動物をより良く守ろう」と声を上げると政治家も動かざるを得なくなる。また、国家間の取引や環境問題も重要な役割を果たす。ネットやSNSをシェアすることで家庭にも情報が届く——変化は速く訪れており、日本が他地域に追いつくには、さほど時間はかからないだろう」

このセミナーの2日前、農水省はアニマルウェルフェアの指針を公表した。家畜の種類ごとに推奨事項をまとめたものだが、具体的な数値目

「遊」(011・252・6752) または滝川(090・9085・9078)まで。

※筆者が編集および一部執筆したアニマルウェルフェアの入門ガイドが、さつぽろ自由学校「遊」から刊行された。A5判56ページのブックレット(無料)で、「家畜福祉をめぐる歴史」といま「北海道の実践農場訪問記」(畜産動物以外のウェルフェア)を軸に構成。問い合わせ、お求めは

	2010.9	2011.9	2012.9	2013.9	2014.9	2015.9	2016.9	2017.9	2018.9	2019.9	2020.9	2021.9	2022.9
スイス	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100.0	100.0
オーストリア	96	97	97	97	97	98	98	98	99.16	99.2	99.2	100.0	100.0
ドイツ	62.4	81.8	86	86.8	88.5	89.2	90	90	94	93.3	94.4	94.9	94.5
オランダ	56	56	60	83	93.4	85	84	82	86	89	89	88.0	88.0
スウェーデン	61.4	64.8	66.1	70.3	75	78.4	83.4	87	82	92	93	95.0	97.0
デンマーク	42	38	42	44	45	44	50	59	71	84	87	84.0	87.1
英国	45	50	51.2	51.4	49	46	46.9	50	52	55.8	57.7	59.6	-
ベルギー	26	26	38	38	38	38	38	50	60.7	-	-	-	-
アイルランド	43	42	41	31	43	43	42.5	44	46	47	48.5	49.9	51.5
フィンランド	26	28	35	37	37	37	37	40	38	42	42	49.0	58.0
イタリア	15.5	23	42.5	30	32	32	58	38	38.2	45.5	55.3	58.0	64.4
フランス	18	20	27	30	32	32	32	31	35	39	46	56.0	64.0
ポーランド	8	8	8	16	10	12	20	25	30	11.7	-	18.9	23.8
スロバキア	20	15	20	15	15	15	18	19	12	17	21	24.0	25.0
ハンガリー	18	13	27.2	18.17	18.2	18.2	34	14.5	16.29	19.24	-	16.1	20.5
スペイン	3	4.3	3	6	7	7	8	7	12	17	23	22.4	27.0
ポルトガル	3	3	3	3	3	3.9	4	5.5	6.5	9.5	25.5	13.9	25.0
オーストラリア	23	32	32	32	32	35	38	45.49	45.5	45.5	40.0	45.5	52.0
ニュージーランド	12	13.5	14	17	18	18	20	23	30.6	33.6	35.4	44.0	47.0
米国	5	5	6	6	6	6	8.7	11	13.9	16.6	19.6	23.7	27.8
メキシコ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.39	0.39
アルゼンチン	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10.0	8.0
カナダ	4	4	4	4	6	6	8.5	9	11	13	16.0	16.0	17.8
中国	0	10	10	10	10	10	10	10	5	3	2	2.0	2.0
インド	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0
韓国	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3.96	4.4
日本	1.3	1.3	7	3.8	4.2	4.8	4.9	5	5.1	5.4	5.8	5.9	5.7

表. 世界の採卵鶏におけるケージフリー卵の割合(作成: 大木茂)  
(出典: IECデータおよび『鶏鳴新聞』記事)

アジア圏では平飼い養鶏の詳細な基準をつくる一方で、すべての鶏卵に生産方法を印字し、消費者に購入の判断をゆだねる取り組みが本格化しているようだ。中国では一昨年にケージフリーの基準が策定され、台湾では昨年よりスパーなどで販売されるすべての鶏卵に生産方法を番号でスタンプする規則を導入。韓国でも飼養方式を表す印字が義務づけ

前出・大木さんの調査によると、アジア圏では平飼い養鶏の詳細な基準をつくる一方で、すべての鶏卵に生産方法を印字し、消費者に購入の判断をゆだねる取り組みが本格化しているようだ。中国では一昨年にケージフリーの基準が策定され、台湾では昨年よりスパーなどで販売されるすべての鶏卵に生産方法を番号でスタンプする規則を導入。韓国でも飼養方式を表す印字が義務づけ

「産的な畜産は、気候変動や森林伐採、生物多様性の消失などに大きな影響を与え、(環境に対する)汚染源にもなっている。また抗生物質の投与は、アニマルウェルフェアのレベルが低い飼育条件を補い、動物由来の感染症の温床にもなる」

「EUはケージ飼育の影響について、欧州食品安全機関(EFSA)に調査を依頼し、同機関は科学的根拠を基に『ケージ飼育の動物のほうが苦しむ』と明確に位置づけた。どの飼育システムでも鶏の突つき合いやカニバリズム(共食)は起きるが、ケージ飼育では鶏が危険から逃れるための行動を制限してしまう」

「市民と市民グループが変化を求め、『動物をより良く守ろう』と声を上げると政治家も動かざるを得なくなる。また、国家間の取引や環境問題も重要な役割を果たす。ネットやSNSをシェアすることで家庭にも情報が届く——変化は速く訪れており、日本が他地域に追いつくには、さほど時間はかからないだろう」

このセミナーの2日前、農水省はアニマルウェルフェアの指針を公表した。家畜の種類ごとに推奨事項をまとめたものだが、具体的な数値目

「産的な畜産は、気候変動や森林伐採、生物多様性の消失などに大きな影響を与え、(環境に対する)汚染源にもなっている。また抗生物質の投与は、アニマルウェルフェアのレベルが低い飼育条件を補い、動物由来の感染症の温床にもなる」

「EUはケージ飼育の影響について、欧州食品安全機関(EFSA)に調査を依頼し、同機関は科学的根拠を基に『ケージ飼育の動物のほうが苦しむ』と明確に位置づけた。どの飼育システムでも鶏の突つき合いやカニバリズム(共食)は起きるが、ケージ飼育では鶏が危険から逃れるための行動を制限してしまう」

「市民と市民グループが変化を求め、『動物をより良く守ろう』と声を上げると政治家も動かざるを得なくなる。また、国家間の取引や環境問題も重要な役割を果たす。ネットやSNSをシェアすることで家庭にも情報が届く——変化は速く訪れており、日本が他地域に追いつくには、さほど時間はかからないだろう」

このセミナーの2日前、農水省はアニマルウェルフェアの指針を公表した。家畜の種類ごとに推奨事項をまとめたものだが、具体的な数値目

「遊」(011・252・6752) または滝川(090・9085・9078)まで。

※筆者が編集および一部執筆したアニマルウェルフェアの入門ガイドが、さつぽろ自由学校「遊」から刊行された。A5判56ページのブックレット(無料)で、「家畜福祉をめぐる歴史」といま「北海道の実践農場訪問記」(畜産動物以外のウェルフェア)を軸に構成。問い合わせ、お求めは

「遊」(011・252・6752) または滝川(090・9085・9078)まで。

※筆者が編集および一部執筆したアニマルウェルフェアの入門ガイドが、さつぽろ自由学校「遊」から刊行された。A5判56ページのブックレット(無料)で、「家畜福祉をめぐる歴史」といま「北海道の実践農場訪問記」(畜産動物以外のウェルフェア)を軸に構成。問い合わせ、お求めは



日本の家畜福祉団体のセミナーで講演するC I W F 欧州代表のオルガ・キコウさん

※筆者のHP「滝川康治の見聞録」<https://takikawa-essay.com/> に本シリーズの過去記事を収録しています。ご参照ください。